

『「答え」を未来への私へ』

(紀の川市優秀賞受賞)

打田中学校 3年 大宅 美衣

「将来何になりたいの。」

中学校に入学してから何度も何度も聞いた言葉だ。そのたびに私は聞き流すぐらいにしか返答していなかったけど、私の中には周りの人に自信を持って言うことができない答えがある。

私の本当の答え、それは「医療の道に進みたい」ということだ。医師や看護師、薬剤師といった日々、人の命を繋ぎ、苦しんでいる人を笑顔にし、1人1人の将来を明るくする仕事。けれど、就くのが難しく、大きすぎる目標のため、誰にも打ち明けることができず、1人胸の中でその答えをひそめていた。

きっかけは、テレビのニュース番組で見た救急外来の現場の様子だった。それは新型コロナウイルスが流行していた時の様子で、全医療従事者がマスクを着け、防護服をまとい、1人の患者に対して皆で対応していた。一瞬で判断し、指示を出す。全員がテキパキ動いていて、命の最前線で働いている現場がとても大変そうで、でもカッコよかった。まるでヒーローみたいで、私とは無縁の世界だと思っていた。それでも私は「医療」に遠いあこがれを持つようになっていった。

しかし、その遠いあこがれの意識が変わる出来事が起きた。それは私が風邪で寝込んだ時に病院を受診したときのことだ。テレビの中に映っていたようなテキパキ動く姿や小さい子どもへの対応、今まで何度も見てきた景色だったが、以前の体験もあり、一段とすごく見えた。この日、私は遠いあこがれだった世界が近くにあるということを感じた。

そんな私の「本当の答え」が現実味を帯びたのは、中学2年生の時の職場体験学習だ。私は、体験希望場所を書く紙に病院に行きたいという思いを紙いっぱいに書いた。その思いが通じたのか私は病院に行く機会をいただいたのだ。

そんな強い思いを胸に私は病院での職場体験に参加した。そこで目にしたのは私が想像していた「華やかな医療現場」とは少し違った、地道で、でも暖かい日常があるように感じた。私は体験中、いくつもの科を見させてもらった。その中でも印象に残っているのは病棟で看護師の方々が患者さんと接する様子だった。早朝から患者さんの体調を1人1人確認し、時には世間話をして病室を和ませたりしていた。私は患者さんが看護師の人と話すと次第に2人とも笑顔になっているところを見て、医療とは、医師などの病気を治す「技術」だけでなく、患者さんの心に寄りそい、共に病へと立ち向かう「思いやりの心」を待つ姿勢が必要だと感じた。

体験中、私は「どんな時にやりがいを感じますか」と質問すると、あるスタッフの方が笑顔で、「患者さんが治ることはもちろんだけど、笑顔になってどんどん良い方向に進んでいくのを感じられるときかな。」と話してくれた。私はその時のスタッフの笑顔を鮮明に覚えている。病院とは、病を治し、命を繋ぐというイメージを持っている人も多いと思うがそれだけではない。笑顔と笑顔のリレーが行われている場所だと感じた。

ニュースを見て抱いた遠いあこがれ。自らの風邪から肌で感じた医療のすごさ。それらが職場体験での経験を通して私の中で答えとして明確となった。

医療の道は決して楽ではない。膨大な勉強量と仕事量、人の命を預かるという責任もある。今の私には人を救うための知識も技術もまだ何1つ備わっていない。でも、この体験を通して見つけた「答え」を叶えたいと強く思うようになっていった。そして私もいつかあの日見たスタッフの方々のように誰かの暗闇に光を当てて、笑顔と笑顔のリレーを行える存在になりたいと強く思った。

「誰かのため」に働くことができる人になれるように。

